

東部ニューギニアに於ける日本軍の作戦と戦死者の慰霊と遺骨収集

東部ニューギニア戦友・遺族会 会長 堀江正夫

第一 はじめに

第二次世界大戦で、ニューギニア本島の北岸沿いに進撃した。米濠連合軍の前に立ちはだかったのは、安達中將が率いる第十八軍を中核とした、陸海軍約15万名であった。

しかし、この日本軍の作戦は、当初の極々一時期を除いて、制空・制海権を完全に連合軍に握られ、真に悪戦苦闘も連続であり、そのため、約13万余名の戦死者を出したが、その遺体は、大部分を収容することさえも出来なかったのである。

第二 日本軍の作戦

1. 作戦の発端

開戦前の計画に基づき、1941年末ラバウルだけは占領したが、開戦時に於いては、ニューギニア本島を含むラバウル以南での作戦は全く考えていなかったのである。

ところが、開戦時及びその後の作戦が順調に推移していた為、1942年の初め頃、1年後と予想していた連合軍の本格的反攻を阻害し、爾後の作戦を有利に展開するために、ニューギニア方面では、ポートモレスビーを攻撃することが決定した。

これにより、3月に陸海軍の部隊がラエ、サラモアを占領したが、これが、爾後3年半に及ぶ東部ニューギニアに於ける陸上作戦の端緒である。

2. ポートモレスビー作戦とブナ・ギルワの戦闘

1942年5月初め、南海支隊により、海路直接ポートモレスビー攻撃を企図したが、これは珊瑚海海戦により断念を余儀なくされた。

その後、6月初めのミッドウエー海戦の大敗にも拘わらず、海軍の強い要請に基づき、南海支隊を以って陸路ポートモレスビーを攻撃することとなり、7月下旬以降ココダを経て陸路、オーエンスタンレー山脈内にて、所在の濠州軍と激戦を交え、これを撃破しながら9月中旬にはイオリバイバまで進出した。この間海軍陸戦隊が、飛行場占領を企図して、ラビに進攻したが目的を達成することが出来ずに撤退した。

当時、ガタルカナル方面の戦況が逼迫し、空海戦力をこの方面に集める

必要から、ニューギニア方面は攻撃を中止することとなり、占領間もない部隊はイオリバイバから撤退を開始した。米濠連合軍の急迫を受けながらも、辛うじて10月末頃その主力を、ブナ・ギルワ地区に後退することが出来た南海支隊は、爾後優勢な連合軍の攻撃に対し死闘を続け、最後に残ったギルワ陣地の諸隊は、命令により1943年1月末マンバレー方面に撤退したのである。

3. ラエ・サラモア方面の

ブナ・ギルワ方面の戦況に鑑み、急遽ラエ・サラモアの要衝を固めるため、1943年1月第51師団の1個連隊基幹の部隊をラバウルから海路輸送し、先ず、ワウの攻撃を期したが不成功に終わり、サラモア防衛の中核となるべき第51師団主力も、3月初め輸送途上のダンピール海峡に於いて、連合軍の航空攻撃を受け多くの犠牲者を出した。このとき、ラエに上陸出来たのは師団長を含むごく一部の人員だけであった。

爾後、師団は逐次兵力を増強し、サラモア地区に於いて防戦に努めたが、彼我の戦力比は如何ともし難く、8月末には命により撤退を準備中、連合軍は、9月初旬相次いで、ブン河河口付近1個師団が上陸し、ナザブ平原に空挺1個師団が降下して来た。

これにより、退路を絶たれラエ・サラモアに残存の約8千名は、4千米の峻険連なるサラワケットを越えることとなり、10月末その主力はフォン半島の北部海岸に到着することが出来たのである。

4. ファインシュハーフェンとボガジン溪谷の作戦とガリ転進

ラエ・サラモア方面の戦局から、速やかにファインシュハーフェン地区の防衛を強化する必要から、当時マダンからラム河河谷に至る、ボガジン溪谷の道路工事を実施していた第20師団から、7月末1個連隊の基幹部隊を、次いでボガジン溪谷の防衛に当たる1個連隊を残した師団主力をファインシュハーフェンへと急行させた。ところが、9月中旬には、先ず濠軍の1個師団がアント岬に上陸し、爾後その兵力を増強していった。我が方は逐次到着する部隊を加えて必死の攻防を繰り返したが、12月中旬には、対岸のニューブリテン島西部の要衝ツルブが連合軍に占領されるに至り、遂に撤退を決意するに至った。

そして、1944年1月初頭には、米軍がマダン東方のサイドル東方に上陸し、その東方に取り残されて、既に戦闘力を失った約1万3千名はサイドルを避けて、ガリからフィニステル山系に入り苦難の転進を行い、その大部分は2月末迄にマダン地区に到達した。

この間、ボガジン溪谷防衛の第20師団の中井支隊は、その一部を以ってガリ転進部隊を擁護するとともに、主力は激戦に堪えボガジン溪谷の要衝を確保したのである。

5. アイタペ作戦及び邀撃作戦

1944年2月末アドミラルティ諸島の失陥により、新たに第二方面軍の隷下に入れられた第18軍は、ウエワク・アイタペ・ホルランジヤの強化のため、鋭意西方に向かい転進中であつたが、連合軍はアイタペおよびホルランジヤに大挙上陸進攻して来た。

日本軍は連合軍の西進を牽制阻止するために、最後の戦力を振り絞って、アイタペに上陸した敵を迎撃することを決意して、各師団のウエワク集結を待ち、第20師団及び第41師団を基幹とする、第一線部隊の2万名を以て、7月10日攻撃を開始し、猛攻を続けたが、各部隊共に多くの将兵の大部分を失い、弾薬、糧食も尽き果て、8月3日遂には攻撃を断念するに至った。

爾後、困難を克服しながら、ウエワク南方地区に後退して、広く分散して、体力の回復を図りながら邀撃体勢を整えることになったが、概ねその体勢を取ることが出来たのは11月末であつた。

ところが、12月には濠軍第6師団はトリセリーニ山系の南麓と海岸沿いに攻撃を開始して来た。両正面共に戦闘に継ぐ戦闘に於いて、逐次ウエワク南方方面に圧迫され、9月下旬には全軍玉砕を決意する戦局となつていたが、8月15日停戦となつたのである。

9月中旬停戦協定を締結した後、軍はムッシュ島に集結を命ぜられて、11月末から翌年1月末までの間に、生存者は逐次祖国に帰国したが、その数は1万余名であつた。

第三 東部ニューギニア戦場の実相と戦死者

前述した如く、1942年3月から1945年8月に至る3年5ヶ月に亘る間に、ニューギニア本島北岸沿いに次々と展開された戦闘は、真に間断のない激戦と転線との連続であつた。

そして、その間の殆ど全期間に亘って制空・制海権が連合軍の手にあつたために、第一線の戦闘が困難を極めただけでなく、人員・武器・弾薬・食料・医薬品等の全てに於いて、補給が途絶えて極度の不足を招き、加えて、峻険連なる山脈を越え大小の河川や大湿地帯を渡渉する、道なき、橋なき長遠の徒歩による転進行動と、マラリアをはじめとする悪疫蔓延により、将兵の損耗を益々大きくしたのである。

かくして生じた13万余の戦死者は、その60%近くが栄養失調とマラリア等に罹患したことに起因するものであった。

したがって、慣例である遺骨の送還は初期の極々一部の時期に限られ、戦死者の殆どは、火葬荼毘にふすことや、十分に埋葬することも叶わず、その遺体は断腸の思いの中、そのまま放置せざるを得なかったのである。

我々、最後に生き残った1万余名が、停戦後終結していたウエワク沖のムッシュ島から祖国に帰還するに当たり、唯一心を残したのは、共に戦い苦労した戦友の遺体を、そのままにして帰国することであり、全員が真に後髪を引かれる思いでニューギニアの地を離れたのである。

第四 戦死者に対する慰霊追悼

1. 日本国内に於いて

各遺族の家庭での慰霊追悼はもとよりであるが、全戦没者の霊を祀った靖国神社と各地出身者の霊を祀った護国神社等では春秋の例大祭や月例祭や毎日の慰霊追悼の諸行事が行われ、戦友や遺族等が毎年ここで慰霊祭を実施しているほか、多くの国民がこれらのお社をお護りしており、参拝者が絶えることはない。

また、国や多くの自治体は、毎年、戦没者追悼慰霊祭を行い、多くの遺族や関係者をはじめ、一般市民もこれに参加して戦没者に対して慰霊追悼の思いを深くしているのである。

2. パプアニューギニアに於いて

パプアニューギニアのウエワクに、日本政府がパプアニューギニア政府の協力を得て、戦没者を慰霊し、平和と友好を祈念する碑を1980年に建立し平和公園として東セピック州政府に管理してもらっているほか、各戦場には、戦友や遺族等がそれぞれの関係深い場所に慰霊碑等を建てさせてもらっており、戦後63年を経た今日でも、毎年多数の戦友や遺族や関係者が縁の各地を慰霊巡拝して香華を手向けて追悼拝礼を行っている。

特に、これらの慰霊碑等の多くが、今日もなおパプアニューギニアの人々によって、温かくお守りしていただいていることに対して、我々は心から感激し深く感謝するところである。

第五 死者を弔う日本の風習

日本では昔から、死者を永く追憶慰霊するために、大別して二つのしきたりがあり併用する形で行われてきた。

その一つは、死者の霊をそれぞれの家庭で、その信仰する宗教に応じて

仏壇や神棚を設けて、毎日の生活の中で身近に祀るのであり、特に国家等に貢献した人は、それらとは別に国民が広く永く敬仰出来る様に神として神社に祀るのである。

もう一つは、キリスト教信者等も含め、死者は総て火葬したうえで、それぞれの家庭の墓に先祖や父母等と共に一緒に納める、或いは、その人の為に新たにお墓を造りその中に納めて永く弔うのである。

したがって、戦没者は総て、特別に靖国神社と各都道府県の護国神社に神として祀ると共に、その遺体は戦場で火葬して遺骨を遺族の元に届けることは、政府の当然の責務として行われて来たのである。

第六 東部ニューギニアに於ける遺骨収集について

1. 戦没者の概要

1945年8月終戦時に東部ニューギニアの各戦場地等に残された遺体（戦没者数）の概数は別添の通りである。

2. 日本政府が実施した遺骨収集実績と現在の遺骨収集作業

政府が1955年から昨2007年までに22回に亘り、日本遺族会や各戦友会等の協力を得て収骨した遺骨は1万7千余柱であり、戦争中や民間に寄って送還された3万2千余柱を、加えても未だ4万9千余柱に過ぎず、未だ戦死者の3分の2近くの遺骨は広大なニューギニアの各戦場の地に眠っているのである。

戦後既に60年余以上を経て、往時を知る生還戦友及び遺骨情報を知っていた現地の人々も年々逝去されて減少し、記憶情報にも精度が低くなっているのに加えて、60余年の経過により土に還って土化してしまったり、或いは、埋葬した墓地も洪水や川の氾濫等による、地形の変化により流失や海没していたり、かつての転進路もジャングル化していたり等、収骨はますます困難となって来ている。

この様ななか、政府は、戦友や遺族の慰霊巡拝時等に入手した遺骨情報や、現地の大使館等に寄せられた情報に基づいて遺骨収集が行われている方式では、情報の減少と精度の曖昧さもあり、事前調査では空振りに終わることさえもあり、2007年度からは、未送還遺骨情報収集事業を立ち上げて、こちらから現地の集落を訪ねて、未送還遺骨情報収集調査を行い、精度の高い遺骨情報調査を行い、それらの情報に基づいて遺骨収集を実施することになり、収集成果の向上に繋げることとなり、当分はこの方式で遺骨収集は行われる予定である。

3. パプアニューギニア側の協力

パプアニューギニア政府や州政府および関係の各機関等は、日本政府が実施する未送還遺骨情報収集や遺骨収集作業に対し、関係人員の派遣、ラジオを通じての住民に対する協力要請広報活動を行い、関係現地住民は遺骨情報の提供、遺骨の保管提供、試掘および収骨作業等に積極的に協力支援を頂いており、遺族や戦友はもとより日本国民に代わり心から感謝を申し上げる次第である。

4. 収骨した遺骨の処理

収骨した遺骨のうち、極めて稀に、所属部隊氏名の判明するものがあるが、その場合は勿論政府からその遺骨は関係ご遺族にお渡しするが、最近では可能なものはDNA鑑定を行い、特定判明出来た遺骨はご遺族にお渡しする様になっている。しかし、残念ながら、南方方面の遺骨は個人を特定可能な遺留品等が遺骨と共に発掘されることが少なく、その殆ど全部は氏名不明のままであるのが現実である。これらの遺骨は一括して、東京の中心部に1948年に政府が建設した、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨される。

政府は毎年5月末に、前年度中に各地域から収集されて個人を特定出来ない遺骨を納骨する拝礼式を行っている。また、民間団体等による慰霊祭も折々に行われており、個人の参拝者も靖国神社同様に多い。

ちなみに、各戦域から収骨されて、この墓苑に納骨されている総数は、現在35万3千余柱である。

第七 終わりに

戦後既に63年が過ぎ、生還戦友は年老い、鬼籍に入った者のも多く、生存戦友の数も少なくなり、遺児も70歳前後となったが、亡き戦友や、亡き父に対する思いは決して薄れることは無く、特にまだまだ多くの遺骨が、そのまま現地に眠っていることに、やるせない焦燥感をだき、1柱でも多くのご遺骨を、一日も早く祖国にお迎えしたいものと心から願っているものである。

それにしても、パプアニューギニアの人々に対し、戦争中には大変な迷惑を掛けながら、自分達にも乏しい食料等の絶大なご支援を頂いたこと、遺骨の収集について政府機関はもとより多くの人々から更なる大きなご支援とご協力を頂いていることに対して、重ねて心からの感謝を申し上げることは言うまでもありません。

戦後、今日まで日本政府および生還した我々戦友を始め多くの国民が、

パプアニューギニア国に対する感謝と友好親善、更なる発展を願い、各種の援助協力行動をして参りましたが、今後共、益々これらの活動は強化されなければならないものと信じております。

今後も引続いて行われます、遺骨収集に関わる諸活動に対して、我々の心情をお汲み取りいただき、パプアニューギニア政府をはじめ諸機関および関係住民の皆様のご協力ご支援をお願いして止みません。

そして、パプアニューギニア国の一層の平和発展と国民の皆様の幸福を願い、日本・パプアニューギニア両国の益々の友好親善関係の深まることを願いつつ終わりと致します。

以上。

2008年9月 記